平成二十四年度　入学試験問題

# 国語（理系）

一〇〇点満点

《配点は、学生募集要項に記載のとおり。》

（注　意）

一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。

二、問題冊子は表紙のほかに10ページ、解答冊子は表紙のほかに12ページある（うち7ページは下書き用）。

三、問題は全部で3題ある（1ページから10ページ）。

四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。

五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。

六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。

七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。

八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

## 一

次の文は尾崎一雄の私小説の一部である。これを読んで、後の問に答えよ。（四〇点）

「圭ちゃん来年の夏休み、お父ちゃんと二人で、国府津の海へ行くんだ」

「ああ、いくとも。大磯へも、小田原へもいくよ、圭ちゃんと二人で」

「うれしいな」二女は、眠っているときにしばしば見せる、あの夢のような笑顔をする。父親と二人で国府津の海岸へ行く、という何の変哲もない空想が、どうしてこの幼女をこんなに仕合せにするのだろう。あるいは、幼女の、病む父親にかけるあらゆる夢と希望とが、こんな変哲もないことに凝結されている、とでもいうのだろうか。

(1)ああ、これは、がんじがらめだ、死ぬにも死ねないというが、ほんとだな、と緒方は肚で溜息をつく。一方彼は、自分の例の雄雞気分が多分にくすぐられることを意識する。彼は、まんざらでもなくなり、よろしい治ってやる、治ってやらないまでも、むやみと死んだりはしないから安心したまえ、と、多分隣りの雄雞に似ているだろう気負った目つきになるのだった。

実は、緒方が、以前よりもどこかものやわらかな男になったことには、もう一つ大きな原因がある。それは、彼が、自分の中に、(2)誰にものぞかせない小さな部屋のようなものをつくっている、という自覚にある。

毎日顔をつき合わせ、話をし、顔つきだけでも相手の気持が大体判る、という家族の者も、緒方がそんな秘密の部屋を持っているとは知らない。恐らく彼らには、緒方がそれを隠そうとしなくても、その存在に気がつくことはないだろう。何故なら、それは彼らに何のかかわりもなく、見たことも聞いたこともなく、考えたこともないだろうものだからだ。

とはいっても、それは別にこみ入った話ではない。緒方のような境遇にある者なら、誰でも直ぐに了解するだろうことがらである。つまり、自分というものは何で生れて来たのか、何故生き、そうして何故死ぬのか、ということ、また、それを考えることによってあとからあとからと湧き出す種々雑多な疑問に何かの答を得ようとあせること、大体それに尽きるのである。そのことについて積み重ねられた多くの考えは、大昔から現在まで、その重みに堪えぬほどで、人間の全努力はそこに向って集中されているかに見える。宗教、哲学、科学、芸術の巨大な集積は、すべてそこへの登路と思われる。緒方もいつとなく

そういうふうに教えられ、そういうものなんだろう、と思ってはいた。しかし、今の緒方から見ると、それは他人事であった。

凡人のつねとして、緒方は、つねられて見なければ、痛さは判らぬのである。その上、自分でつねるのは余り好まない。文字や言葉の上では一応判り、時には自分でもそんな文字や言葉を吐き散らすこともないのではなかったが、ただそれだけのことに過ぎなかった。ちっとも身にしみてはいなかった。

自分が病気になり、どう考えても余り長い命でない、という事実にぶち当ったとき、緒方は始めて、痛い、と感じた。(3) 彼には、判り切ったことが判り切ったことでなくなった。素通りして来たものを、改めて見直すと、ひどく新鮮であった。ありふれたあたりのものも、心をとめて見ると、みんなただものではなくなった。彼は自分の中の部屋に引きこもって、それらを丹念に噛みくだき始めたのである。そういう時の彼は、自分だけであり、目先にちらつく家族は、心につながる何物でもなかった。

自分のこんな状態を、家族たちの誰に話そうと、まるで無益なことを彼は知っている。これら天真らんまんな、若い、生命に充ち溢れた人間たちに、それが通じようはずはない。通じないのが当然だし、通じるのは間違いなのだ。彼らは、その生命の溢れるままに、泣き、笑い、歌っていなければいけない。緒方のような衰頽者の、夕暮れの思考は、彼らにとっては毒汁でしかないだろう。やがて彼らにも、避けがたい薄暮がおとずれるだろうが、それはその時のことでいいのである。

だから緒方は、何気ない顔で、彼らとのつき合いをつづけている。顔をつき合せ、話のやりとりもそつがないのに、頭はまるで相手とかかわりない思考にとらわれている自分を、緒方は、惨酷な、冷たい奴と思う。しかし、自分のいのちについて、自分が考えずに、いったい誰が考えてくれるだろう。これは、病気を看護し、献身的努力で自分の生命を救ってくれ、あるいは生きのびさせてくれる、というようなこととは、(それは感謝すべきことであり、好ましいことでもあるが、しかし)全く別の話なのだ、——そう思う。緒方は、いのち、あるいは生というものについて、納得したいのだ、ただそれだけの、至極簡単なことなのだ。そしてそれは、自分で納得するより外、仕方がない。そのこととは、ただ一人でしか向き合うことが出来ず、

その作業はただ一人でしか出来ない。

せんだって、ある若い文学批評家から私信が来て、その端に、「赤ん坊ギャアギャア、女房プリプリ、雑事は山積で、このところ出家遁世を思うや切なるものがあります」とあった。緒方は「出家遁世ぐらい、家の中にいても出来ますから、試しにやってごらんなさい」と返事の中に書いた。何の気なしに書いたのだが、あとで、これは、と思ったのである。どうも緒方の状態には、そういえなくもない節がある。勿論、緒方は東洋流の、無常感、諦観の上にあぐらをかいているのではない。若しそうなら、彼は、文章など一行も書きはじしないだろう。書く必要がないだろう。彼には、未だ野心と色気が残っている。

ただ、こっそりと自分だけの部屋を用意し、閑さえあれば(彼は、大体、普通の意味では閑人である)家族と離れてそこへもぐり込もうとする、どうやらこれは、一種の出家遁世かも知れない。

「寝ていて出家遁世出来る法、か。(4)俺の雄雞精神も、影がうすくなった」

隣の雞小屋では、また卵を生んだらしい。あの雄雞の元気には、とても及ばない。いささかも遅疑逡巡するところない、あの気負い方はどうだ。あれは立派で、堂々としている。あれを、したり顔に、滑稽だ、などと見るのは、引かれ者の小唄かも知れない。俺も、いや俺は、疳癪を起さず、凝っと持ちこたえて行こう。堪え、忍び、時が早かろうと遅かろうと、そこまで静かに持ちこたえてゆく、——それが俺のやるべきことらしい、などと緒方は考えつづけた。

(尾崎一雄「痩せた雄雞」より)

**問一**　傍線部(1)のように緒方が感じるのはなぜか、説明せよ。

**問二**　傍線部(2)はどのようなものか、説明せよ。

**問三**　傍線部(3)はどのような事態を意味するのか、説明せよ。

**問四**　傍線部(4)はどのようなものか、本文全体を踏まえて説明せよ。

## 二

次の文は、ロシア語の通訳、米原万里のエッセイの一部である。これを読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

通訳の使命は究極のところ、異なる文化圏の人たちを仲介し、意思疎通を成立させることに尽きる以上、両方がいかなる文脈を背景にしているかを事前に、そして通訳の最中も可能な限り把握し、必要ならば字句の上では表現されていない、その目に見えない文脈を補ってあげねばならない。

しかしながら、それは極度に狭められた時間的制約の中で行われることを常とする。

「この人タヌキで、あなたはキツネ、わたしはウナギ」

という文章が仮にあったとして、翻訳ならば、タヌキ、キツネ、ウナギを字句通り訳したうえで、これだけでは、せいぜい、

「人形劇の配役でも決めている場面だろう」

と解釈されてしまう危険があるので、それぞれに注をつけて、日本の店屋物料理に関するウンチクを傾けた説明訳をくどくどとやってもかまわない。通訳も、時間的余裕の許す限り、それをやる。

だが、大方の通訳現場で、それは絵に描いた餅である。最近のロシアの改革に関する会議で、日本側の著名な学者が、

「今のロシアの改革の到達レベルは、大政奉還は済んだけれど、廃藩置県はまだ終わってないというところですかな、ハハハハ」

と発言して、(1)同時通訳ブースにいた私は往生した経験がある。

同時通訳ならば、原発言者がしゃべっている時間がすなわち通訳に与えられた時間であるし、逐次通訳の場合は、理想的な通訳時間は原発言が使った時間の八〇％といわれているのだ。原発言に要した時間を一〇〇％としたとき、通訳は、その中で伝えたいと思っている情報を余すところなく伝えながら、時間的には八〇％が理想的。ぎりぎり許されるとしても同じ一〇〇％。通訳が一五〇％、二〇〇％も、つまり原発言の二倍もしゃべることは、許されない。といっても、現実には、原発言の三倍も四倍もしゃべる通訳はいる。ただし、次回から声がかからなくなるだけである。

しかも、そもそも「ん」以外には、子音が母音なしで存在し得ない日本語は、外国語をそのまま訳すと、むやみやたらと時間がかかる。翻訳書を黙読する限りは、あまり意識しないことだが、欧米の戯曲を翻訳したものを、そのまま舞台にのせると、二倍から三倍オリジナルより時間を喰うというではないか。

漢字の音読み言葉にすると、情報量の多い割に、時間的嵩がコンパクトになる利点があるが、耳から聞いたとき、音読み言葉は伝わりにくい。通訳にとっては、聞き手に伝わり理解されてこそ使命は完遂するのだから、どうしても耳から聞いて分かりやすい大和ことば系の表現を多用しがちになる。

というわけで、(2)まさに前門の虎、後門の狼。虎は、

「異文化間の溝を埋めよ、文脈を添付せよ」

と眼を光らせているし、狼は、

「極力、訳出時間を短縮せよ」

と容赦なく迫ってくる。虎の要求にそおうとすると、時間を喰い、狼のいうとおりにすると、文脈を添える余裕がなくなる。

十三年前、初めて同時通訳の仕事を引き受けたときのこと。いざ本番に入ると、どうしても発言者のスピードに訳がついていけない。

「こんなことは不可能だ」

と思い、気がつくと、私はヘッドフォンをはずして、同時通訳ブースを飛び出してしまっていた。

師匠の徳永氏が追いかけてきて、ポンと肩をたたくと、

「万里ちゃん、全部訳そうと思うから大変なんだ。分かるところだけ訳していけばいいんだよ」

と言ってくれた。

「そうか、全部訳さなくてもいいのだ。それに、そもそも分かるところしか訳せないのは、アッタリマエではないか」

とすっかり肝っ玉が据わってしまった私は、その日、経験豊かな二人の先輩に支えられながら、なんとか無事に通訳を終える

ことができた。

徳永師匠には、今まで私の角膜あたりに張りついた鱗(うろこ)をずいぶん取り払っていただいたが、(3)この時の戒めには、とくに感謝している。というのも、私はかなり語り口がスローモーで、つまり時間単位あたりの言葉の量がもともと少ない、その意味では通訳に向かないタイプなのである。大は小を兼ねるという。スピードの速い人は、ペースを落とすこともできるが、私のように遅い者が、ペースをあげるのは不可能なのだ。

要するに、残る手段は、省略。余分な言葉を極力排除する以外にない。しかも言葉の量は少なくとも、情報量は減らさないこと。では、一体何が省略可能で、何を省略してはいけないか。どうでもいい枝葉末節にこだわって、大事な情報を落としてしまうような省略では困る。

（米原万里「前門の虎、後門の狼」より。一部省略）

**問一** 傍線部(1)について、「日本側の著名な学者」の発言によって、なぜそのような状態になったのか、説明せよ。

**問二** 傍線部(2)について、筆者はこの状況に対処するにはどうしたらよいと言っているのか、説明せよ。

**問三** 傍線部(3)について、その理由を説明せよ。

白

紙

## 三

次の文は、内大臣が北の方の死後に幼い娘の部屋を訪れる場面を描いたものである。これを読んで、後の問に答えよ。（三〇点）

なにとなくしめやかなる行ひの隙に、昼つ方姫君の御方へおはしたれば、宰相の乳母・侍従など二、三人ばかり候ひて、昔の御事など言ひ出づるにやあらん、うち萎れつつながめあへり。姫君は小さき几帳引き寄せて添ひ臥し給へり。歳の程よりもこよなく大人びて、上のことを尽きせず思し嘆きたるけにや、すこし面痩せ給へるしも限りなく見え給ふ。*鈍色の細*長ひき重ねて着給へるぞなかなかなまめかしく様殊なる。前*斎宮より御文とてあるを見給へば、薄紫の色紙にいとこまやかに書き給ひて、奥つ方に、

植ゑおきし*垣ほ荒れにし*とこなつの花をあはれとたれか見るらん

とあり。(1)「この返しとく」とそそのかしきこえ給へば、いとどつつましげに思したれど、筆など取りまかなひて、御厨子なる薄鈍の色紙取り出でて書かせ奉り給ふ。(2)御手なども行く末思ひやられて、いと見まほしくうつくし。(3)垣ほ荒れてとふ人もなきとこなつは起き臥しごとに露ぞこぼるる

（『苔の衣』より）

注（＊）

鈍色＝濃い鼠色。

細長＝女児や若い女性用の着物。

前斎宮＝亡き北の方の姉にあたる人。

垣ほ荒れにし＝北の方が亡くなったことをたとえる。「垣ほ」は垣根のこと。

とこなつ＝なでしこの別名。

**問一**　傍線部(1)を、主語を補って現代語訳せよ。

**問二**　傍線部(2)はどういうことか、わかりやすく説明せよ。

**問三**　傍線部(3)を現代語訳せよ。

**問題は、このページで終わりである。**